

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 12 日現在

機関番号：53901

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2008, 2010～2011（2009 育児休業により中断）

課題番号：19720055

研究課題名（和文）身分的・空間的境界領域の人々の営みを中心とした近世和歌の文化史的研究

研究課題名（英文）A study of cultural history of the early modern times 31-syllable

Japanese poem mainly on the working of the people of the spatial border domain of the social position

研究代表者

加藤 弓枝（KATO YUMIE）

豊田工業高等専門学校・一般学科・准教授

研究者番号：10413783

研究成果の概要（和文）：

本研究では、江戸時代において、身分的・空間的境界領域の人々による学問の営為がいかなるものであったのかについて注目し、とくに和歌を中心に考察した。その結果、とりわけ非蔵人の学芸活動の実態に関して明らかにすることができた。具体的には、彼らが「書籍講」という独特の「講」を営み、書物を共同購入していたことを明らかにすることができた。これらの成果によって、近世文壇史・文化史へ新たな視点を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：

In this research, it pursued about the actual condition of the learning of people of an interim status in the Edo period. In particular, it considered focusing on the 31-syllable Japanese poem. As a result, an organization called “hikuroudo” was able to do it clearly about what kind of learning activities were carried out. They are performing an organization called “shojyakukou” and, specifically, discovered the fact which had procured a lot of books jointly. I was able to present a new viewpoint to the history of a literary world and cultural history of the Edo period by these results.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,300,000	480,000	2,780,000

研究分野：日本近世和歌文化

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：非蔵人 日本近世文学 日本近世文化 堂上 地下 和歌 小沢蘆庵 書籍講

1. 研究開始当初の背景

前近代の日本人にとって、和歌詠作とはいったいどのような意味を持つ行為であったのか。そこには近代的な文学創作の範疇を越えた、文化的な意味があったのではないか。これらの問題を解明する

ことが研究開始当初の背景にあった。

和歌文学史の研究は飛躍的に進展したものの、従来の和歌文学研究では、歌壇の動向や歌論・和歌の注釈などがその中核をなしており、和歌詠作の具体的な実態については未だ十分に解明されているとは言い難い。千年以上に及ぶ和歌の歴

史の中で、当然ながら近世期については、詠作に関わる文献資料が大量に残されており、その実態を探るのには最も適した研究対象である。しかしながら、それら資料群は、あまりに膨大で未解明の部分が大きい。膨大に残る資料群を何とか活用し、和歌詠作の実態や現場を具体的に明らかにすることは、文化史の面から見ても意義がある。

2. 研究の目的

これまで、この問題について、膨大に残る近世期の和歌関連資料を通して探ってきた。その過程において、身分的境界領域にいた人々—非蔵人（ひくろうど）・御師（おんし）—による和歌詠作の実態を追究し、公家歌人とも地下歌人とも違う、彼ら独特の詠作行為の一端を明らかにした。従来の和歌研究は、公家歌人や地下の有力歌人が主な研究対象とされてきたが、考察の結果、さまざまな身分・地域による和歌の実態を明らかにする必要性を強く実感した。そこで、本研究では、具体的に以下の2点を目的とした。

(1) 身分的境界領域にいた人々（公家でも庶民でもなくその両者の狭間にいた者）—非蔵人・門跡関係者・坊官・御師等—の和歌詠作・学芸営為の現場を解明すること

(2) 公家や一部の地下歌人だけでなく、諸階層の人々の和歌詠作・学芸営為の現場を解明すること

本研究の特色・独創的な点は以下の3点である。まず第一に、和歌詠作現場の実態を明らかにする点である。従来の和歌研究は、歌論や歌人の伝記、和歌の解釈が主な研究対象とされてきた。しかし、実際にどのような過程を経て、和歌が詠まれ、磨かれ、選ばれたのか、その具体的な現場に関しては、必ずしも解明されていない。この追究を通して、前近代において、和歌を詠むということが、どのような意味を含んだ行為であったのか、文化的に明かに出来るものと思われる。

つぎに、堂上・地下のいずれにも属さない中間的身分である非蔵人など、境界領域にいた人々の文芸活動に着目した点である。このような人々の文化的な位置づけについては、いまだ研究の端緒が開かれたばかりで、特に後者についてはほとんど研究が進んでいない。彼らの和歌のありような独特で、その解明は和歌史に新たな一面を提示する可能性がある。

3. 研究の方法

以上の事項を解明するためにも、古人の残した最大の文化遺産である古典籍を、可能な限り博搜して、関連資料を見出し、書誌を収集するとともに、それら資料群を学問的に位置付けてゆく。特に蘆庵文庫（京都市）に所蔵される資料を考察するとともに、国立国会図書館・内閣文庫を始めとする諸文庫の調査を行い、その和歌資料及び学芸資料を整理検討する。

蘆庵文庫とは、京都の洛東の新日吉神宮内にあり、ここには、近世中期に京都で活躍した歌人である小沢蘆庵、ならびにその門人に関わる和歌資料、さらには非蔵人であり当神宮の宮司であった藤島家に関わる和歌・非蔵人・神社関連資料が膨大に所蔵される。そこで、その多量の資料群を整理検討した。この文庫には、さまざまな階層の人々の和歌資料が混在しており、その資料群を考察することによって、従来の研究で主な研究対象とされてきた公家歌人や、一部の地下歌人だけではない諸階層の人々の和歌詠作・学芸営為の現場を探ることが可能である。主な対象となる文庫は主に蘆庵文庫であるが、全国の図書館・文庫・資料館等へも赴く。

4. 研究成果

研究当初は、空間的境界領域にいた伊勢の御師なども対象しつつ研究に取り組んでいたが、調査の過程で大量の資料を発見したこともあり、結果的に身分的境界領域の人々に比重を置くこととなった。

本研究の結果、身分的・空間的境界領域の人々の学芸活動に関する実態を明らかにすることができた。具体的成果としては、以下の3点が挙げられる。

《1 蘆庵文庫の蔵書目録を共同で編纂し、刊行》

共同研究によって、蘆庵文庫の所蔵資料の目録を編纂し、青裳堂書店から刊行した。この目録刊行により、はじめて蘆庵文庫の全体像を明らかにすることができた。さらにこの編集の過程で、大量の非蔵人文書を発見することができた。

《2 非蔵人の和歌活動の実態の一部を明らかにした》

拙稿「小沢蘆庵と藤島宗順」（『蘆庵文庫目録と資料』青裳堂書店）で、身分的境界領域にいた非蔵人の和歌詠作現場に関して考察し、「非蔵人にとって和歌（風雅の道）は、あくまでも『官暇』に嗜むべき教養であった。公家たちのように、一種の職務として要請されたものでもなければ、地下人たちの多くの

ように、趣味や習い事でもなった。そのことはかえって、公家たちのように伝統和歌に縛られることなく、比較的自由的な立場で、一方、人としての生き方に関わるような、純粹の教養として発展する可能性を、彼らの和歌は秘めていたのではなかっただろうか。」と指摘した。

《3 非蔵人による「書籍講」という特殊な営為の実態を明かにした》

その他の成果としては、とりわけ非蔵人の学芸活動内容に関して指摘することができた。具体的には近世中期から後期にかけての非蔵人は、京都において歌壇に新風を吹き込んだとされる小沢蘆庵の門人が多い。そこで、蘆庵門の非蔵人の動向を探ることで、彼らが同時代において果たした役割を追究した。

具体的には、新日吉神宮の神官であり非蔵人であった藤島家の人々の資料に着目した。非蔵人の日記の記述からは、彼らが公家との間で書物書写のやりとりの際に、重要な役割を果たしていたことが判明した。

また、彼らが「書籍講」といった独特の「講」を営み書籍を収集していたことを明らかにすることができた。「書籍講」とは、参加者が資金を出し合って書物を購入し、その所有者を籤によって決めるという組織である。島崎藤村の『夜明け前』にこの講に関する記述が登場するが、その実態に関する先行研究はほとんどない。蘆庵文庫の資料群の中には、この講に関するものがあり、その内容を考察したところ、非蔵人のみならず、同時代の文壇を考える上で興味深い営為として浮かび上がってきたのである。関連資料を考察した結果、少なくとも175点の書物を彼らが共同購入していたことが分かり、さらにその購入書物の分野は、和歌・物語・漢籍・歴史等と多岐に渉るものの、比較的内容の堅いものが大半を占めていることが分かった。そしてその中心となっていたのは新日吉神宮の神官で非蔵人の藤島宗順であった。

では、なにゆえ彼らは書籍講を結成したのか。まず第一に当時高価なものであった書物を、共同購入によってより多く手に入れることが、その理由としてあったのであろう。しかし、書物を共同購入することが目的であれば、書籍講の参加者が非蔵人のみである必然性はない。つまり、彼らが「非蔵人」という横の繋がりを強く意識していたことが考えられる。この講には酒宴を禁じる規定があった。一種の寄り合いとしての性格を持つ「講」なる組織を考える時、酒宴が催されることはごく自然なことである。それを一切禁止した背景には、彼らにとってこの講が、非蔵人のための一種の学問所としての役割を果たしていたことがあったのではないか。さらに、書籍講が実施されていた時期と、真仁法親王

を中心とした妙法院宮サロンが形成されていた時期とが一致するのも、偶然とは考えにくい。この講において、酒と肴のかわりに茶とたばこを片手に、おそらく彼らは書物購入について話し合うと同時に、地下の歌人や文人、はたまた公家の世界についての最新の情報をも交わしていたのだろう。非蔵人たちは、堂上と地下間を単につないでいたのではなく、自らが両者を往来できる特殊な立場であることを意識し、そこに独自の存在意義を見出そうとしていたのではないだろうか。

時代が下るにしたがって、非蔵人を取り巻く環境は悪化していく。幕末の公家社会では品行が乱れ、困窮した公家の中には子弟の教育もままならない者が多く出てくるようになった。そのような折、御所内に公家社会の頹廢回復を目的とした「学習院」なる公的教育機関が設立されることとなる。この学習院は、主に貧しい公家の子弟を対象としていたが、広く京都御所に出仕する人々にも入門が呼びかけられた。参加者の意識はまちまちであり、怠惰なため名簿からはずされるものもいたという。そのような中で、非蔵人の子弟たちが、その勤勉ぶりから褒賞を得たことがあった。彼らが褒賞を得ることができたその背景には、かくのごとき前代の非蔵人たちが横の繋がりを意識し、勉学に励んできた歴史があるものと思われてならない。

以上の研究成果によって、非蔵人を中心とした身分的・空間的境界領域の人々による和歌ならびに学芸活動の実態の一側面を解明することができた。さらに、データベース作成のための基礎データについても収集することもできた。

これらの研究を今後も進めることによって、近世歌壇史・文壇史・文化史へ新たな視点を提示できるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

①加藤弓枝、「久世家と古今伝授資料」、『久世家文書の総合的研究』、43～51(2012)、査読無

②服部仁・服部直子・加藤弓枝、「翻刻『加藤枝直日記』6」、『同朋文化』7、17～50(2012)、査読有

③服部仁・服部直子・加藤弓枝、「翻刻『加藤枝直日記』4」、『東海近世』19、34～52(2011)、査読有

④服部仁・服部直子・加藤弓枝、「翻刻『加藤枝直日記』3」、『同朋文化』5、97～127 (2010)、査読有

⑤加藤弓枝「荷田家と小沢蘆庵」『新編荷田春満全集 第12巻』、月報12、3～4 (2010)、査読無

⑥加藤弓枝「『書籍講』の成立とその背景-蘆庵文庫所蔵関連資料の翻刻と解題」、『金城日本語日本文化』85、61～80 (2009)、査読有

⑦加藤弓枝・眞野道子「富加町郷土資料館蔵『万葉集管見』一解題と翻刻(下)」『豊田工業高等専門学校研究紀要』42、217～242 (2009)、査読無

⑧加藤弓枝「富加町郷土資料館『万葉集管見』一解題と翻刻(上)」『豊田工業高等専門学校研究紀要』41、193-222 (2008)、査読無

⑨加藤弓枝「非蔵人と『書籍講』-蘆庵門藤島宗順の営為を中心に-」『鈴屋学会報』25、63-82 (2008)、査読有

⑩加藤弓枝「小沢蘆庵の和歌指南-安永期の添削資料を中心に-」『中世近世和歌文芸論集』、346～374 (2008)、査読無

⑪加藤弓枝「<書評>塩村耕著『こんな本があった!江戸珍奇本の世界』」『名古屋大学国語国文学』100、227-233 (2007)、査読無

[学会発表] (計8件)

①加藤弓枝「妙法院宮の嵯峨野遊覧」、近世上方文壇における人的交流研究会、2012年3月9日、大阪大学(大阪府)

②加藤弓枝「蘆庵文庫の蔵書形成-書籍講を中心に-」、国文研基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」、2011年5月27日、国文学研究資料館(東京都)

③加藤弓枝「近世上方文壇の人的研究-小沢蘆庵と羽倉家を中心として-」、東海近世文学会、2011年10月22日、熱田神宮文化殿(愛知県)

④加藤弓枝「小沢蘆庵と非蔵人の和歌営為-指導の実態とその影響-」、和歌文学会1月例会、2009年1月10日、青山学院大学(東京都)

④加藤弓枝「『書籍講』の成立とその背景-

近世後期非蔵人による営みを中心に-」第42回書物・出版と社会変容研究会、2008年11月1日、西尾市岩瀬文庫(愛知県)

⑤加藤弓枝「小沢蘆庵門の文芸活動」鈴屋学会第25回大会、2008年4月20日、本居宣長記念館(三重県)

⑥加藤弓枝「身分的境界領域の人々の和歌営為-蘆庵門人を中心に-」、東海近世文学会、2008年4月12日、熱田神宮文化殿(愛知県)

⑦加藤弓枝「宣長の和歌指南-添削資料は面白い」、本居宣長記念館(平成19年度宣長十講)、2008年1月15日、松阪市松阪公民館(三重県)

⑧加藤弓枝「文之字屋・美濃派・雲英文庫」、平成19年度富加町郷土資料館秋季特別展、2007年12月1日、富加町郷土資料館(岐阜県)

[図書] (計4件)

①加藤弓枝『細川幽斎』、笠間書院 1～119 (2012)

②飯倉洋一・大谷俊太・加藤弓枝・神作研一・盛田帝子・山本和明『日本書誌学大系 98 蘆庵文庫目録と資料』、青裳堂書店、1～802 (2009)

③日下幸男・安井重雄・阿尾あすか・長谷川千尋・長谷川薫・大谷俊太・岡本聡・藤本孝一・海野圭介・小高道子・西田正宏・神作研一・盛田帝子・久保田啓一・中川豊・加藤弓枝・万波寿子『龍谷叢書 15 中世近世和歌文芸論集』、思文閣出版、1～401 (2008)

④神作研一・中川豊・加藤弓枝『加治田の風雅-江戸の年賀状』、富加町教育委員会、1-13 (2007)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 弓枝 (KATO YUMIE)

研究者番号: 10413783